

MOTUL

MFJ全日本ロードレース選手権シリーズ 第6戦 ツインリンクもてぎ  
モリワキレーシング レースレポート

GP250クラス

#83 森脇 尚護選手 予選 1位 予選タイム: 1min53sec758  
決勝 TOP 決勝BEST: 1min54sec786MFJ SUPERBIKE  
ALL JAPAN ROAD RACE CHAMPIONSHIP

## GP 250

全日本選手権第5戦岡山国際大会に参戦し、本格的に実戦開発というステージに歩み出したMD600プロジェクト。今回は、同シリーズ第6戦ツインリンクもてぎ大会に開発の場を求めた。

レース開催の前週に三日間のテストが行われたが、台風の接近に伴い三日間ともほとんどウエットコンディションとなってしまう、ドライでの十分なテストはまったく行うことができなかった。そのため、スリックタイヤを履いての本格的走行は、レースウイーク初日のART合同テストから、ということになってしまった。

今回ツインリンクもてぎに持ち込んだのは、前回のレースで使った7号機のデータをベースに、まったく新たに造り上げた10号機と、その手前のバージョンである9号機。10号機に合わせたニューデザインのスイングアームも持ち込んだが、ドライのデータがあまりに少ないことから使用せず、9号機のスイングアームを10号機フレームに装着し、これをメインカーとして使用することとした。ツインリンクもてぎはMotoGP開催サーキットということで、GP2クラスの目標タイムはMotoGPのGP250クラスのコースレコードタイムである1分51秒412が目標となる。

金曜日は朝8時から30分、12時15分から30分間の計1時間が走行時間となった。前述のようにドライのデータがまったくない状況のため、基本的なマシンの前後バランスを探るところから作業をスタートさせなければならない。10号機は新しいアイデアを盛り込んでいることもあり、従来のデータをそのまま使うことができない。結局、金曜日の走行をフルに使っても基本点なマシンバランスを見付けることはできなかった。

さらに土曜日の予選は、わずか35分のセッションが1回。せめて2回あればインターバルを使って大きな仕様変更を行うこともできるが、わずか1回では不可能。そのため、金曜日の走行データから推測したセッティングでこの35分の走行に臨むこととなった。その結果、1分53秒758と満足のいくタイムではないが、ポールポジションの獲得には成功した。

日曜日の朝に行われるウォームアップ走行は15分。ここでもさらにセットアップを進め、決勝に臨むこととなった。この日の他のクラスの決勝で赤旗が合計3回出たことから時間が遅れ、GP250クラスのレースも30分ほど遅れて行われることとなった。そのためにスタートは午後3時40分と、気温が徐々に下がっていくコンディションとなってしまった。監督は今回のレースウイーク中に行いたい課題の中から、気温が下がるこの状況を判断して大きくセットアップを振ることにした。

いよいよレースがスタート。森脇尚護選手はスタートダッシュを見せ、トップで1コーナーに飛び込んでいく。この週のV字コーナーで250ライダーにインを刺され、一瞬トップの座を譲ったがすぐに首位を奪い返すと、そのまま引き離しにかかる。ペースは1分55秒台と、後続のGP250ライダーと比較すると大きく上回っているが、想定タイムからは大きく離れている。ラストラップに1分54秒786と、このレースのファステストラップをマークして、今回のレースはフィニッシュとなった。

## [ CIRCUIT DATA ]

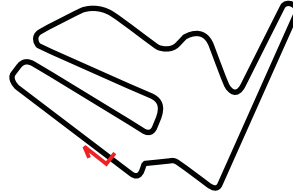
TWIN RING MOTEGI

LENGTH 4,801m

STRAIGHT 762m

RIGHT TURNS 8

LEFT TURNS 6



MOTUL

TOTAL OF 2 PAGE(S) INCLUDING THIS ONE

GP250クラス

#83 森脇 尚護選手 予選 1位 予選タイム: 1min53sec758  
決勝 TOP 決勝BEST: 1min54sec786

## GP 250

## 森脇尚護監督

「決勝はサスペンションをハード方向に振って走らせました。結果的には今日のコンディションに合っていなかったようで、かなりスローペースでのレースになってしまいました。ですがこのマシンはユーザーに渡して使ってもらうために開発しているのだから、こういう悪い状況というのもこの段階では経験しておくことが大事です。そういう意味で、これもいいデータ取りになりました。とにかく今回のレースウィークは走る時間が少なすぎました。ですが、限られた時間の中でもトライしてみたいと考えていたことがいくつか投入し、データを得ることができたので、収穫はありました。これで車体の基本寸法はある程度確定できたので、今後はこの10号機フレームをベースにして軽量化を進めていきます。軽量化は設計グループで進めることができるので、ここまで重ねてきた走行開発とは別の流れで行うことができます。まったくゼロからモノ造りをするということは、我々のような仕事をしている人間にとっては、本当に楽しい作業です。開発陣も非常に意欲を持って取り組んでくれており、開発のスピードもどんどん上がっています。私が長年経験してきた事柄を3年ほど前から若いスタッフに伝える作業をしてきているのですが、今回のMD600プロジェクトには、それが大いに役立っています。全日本への参戦はここでいったん終了し、このあとはスペイン選手権を戦うチームからマシンを走らせたいというオファーがあるのでそれを受け、MD600を走らせるために向こうへマシンを送ります。できるだけ多くのライダーに開発段階で乗ってもらうことで、さまざまなデータをマシンヘフィードバックしたいので、絶好のチャンスだと考えています。さらにマシンを進化させ、皆さんに喜んでいただけるようなレースができるよう頑張りますので応援、宜しくお願いいたします。今回もとてもたくさんのファンの方に声をかけていただきました。ありがとうございました。」

## 森脇尚護選手

「今日はサイティングラップを終えた時点で大きく振ったセットアップの方向性が、狙った方向から大きくずれていることが分かっていたので、序盤は慎重に走ることを心がけました。特にスタート直後は気を付け、意識してペースを落としましたので、1周目にパスされたシーンは想定していました。そうしたマシン状況だったので、ペース的には1分55秒台とスローでしたが、ライディング面で抱えているネガが消せないか、いろいろトライしてみました。そうしたトライの中でいいところ、悪いところも見え、オーバーランしそうなリインにつき過ぎたりする中で、いいところをそれぞれ組み合わせたらどうなるかトライしたのが、ラストラップの1分54秒台でした。レベル的にはまだまだ低いところのものでしたが、走行データを得るという意味では、いろいろ収穫は大きかったです。今回のレースウィークは250ライダーと一緒に走るチャンスもあったので、彼らがどのようなラインで走るのか、MD600と直接比較することもできたので貴重な開発となりました。金曜日に午前と午後で合計1時間、土曜の予選は35分、決勝は20分弱と、トータルで2時間弱は、三日間の走行として少ないのが残念です。開発ライダーとしては、もっと走りたかった、というのが正直な感想ですね。そういう意味では思ったほど開発を進めることはできませんでしたが、自分自身のノウハウや、マシン造りのヒントになることはとても多かったです。得たものはすべて、今後の開発に生かしたいと思います。今回もたくさんの応援をいただきましてありがとうございました。」

